
仮面ライダー 0 1 【ゼロワン】

元気丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー01【ゼロワン】

【Nコード】

N9318M

【作者名】

元気丸

【あらすじ】

ここに今、悪の秘密結社ショッカーを裏切り人類をショッカーから守る青年がいる。

その名は【仮面ライダー01】

【作品介绍】

この世の闇社会の黒幕【シヨッカー】。

彼らは罪人を【怪人改造】していた。

シヨッカー大首領の企画により【第一回シヨッカーコロシウム】が行われた。

それは怪人同士の最強王座を決める大会だった。

優勝者にはシヨッカーが新開発したベルト【タイフーン】が手渡された。

そして「闇社会から世の中に解放される」という権利もあった。

そしてコロシウムの優勝者【本郷猛】にコードネーム：【ホッパー】は、この世に出て、密かに殺戮行為をしていた。

しかしシヨッカーに入団する前に、世話になっていたオートレースの師【立花藤兵衛】に出会う。

そして、そこで働いている【緑川ルリ子】に恋をする。

一方ショッカーは、本郷の搜索のために改造人間「コードネーム：スパイダー」を送り込む。

そこで本郷は決心する・・・自分の力をショッカーに立ち向かうために使うことを・・・！！！！！！

【作品介绍】（後書き）

ディレンドが一段落したら更新します。

「ブローグ」―ショッカーコロシウム―

〽ショッカー本部・スタジアム内〽

《さあ！怪人最強を決める大会、ショッカーコロシウム！！！！》

ここはショッカーコロシウム会場。東京ドームの様な所で客席にはマスクをかぶった戦闘員が沢山いる。
会場内に実況か鳴り響く。

《次はいよいよAブロック決勝です！！！！》

2人の人間がそれぞれ出てくる。

《まずはレッドコーナー！！スパイダー！！！！》

――ワアアアアアアアアア――

すさまじい歓声が響き渡る。

《続いてブルーコーナー！！バッド！！！！》

——ワアアアアアアアア——

こちらもすごい歓声だ。

《レッツ！！》

2人はショッカーマークが彫られているショッカーベルトのバックルを腰に付け、ベルトが自動的に巻かれた。

すると体中に電撃が走り、2人は怪人になっていた。

その姿はまさに蜘蛛男、蝙蝠男。

《スタート……！》

2人はお互いに飛びかかって行った。

「キシャー」

スパイダーの口から糸状のものが出てきて、バットの両足に付き動きを止めた。

「くっ」

その間にスパイダーは後ろに回り込み、一撃をくらわせた。

「ぐはっ」

「死ね」

スパイダーがトドメを刺そうとしたその時、バットから強烈な超音波が発生した。

「ヤメロ——！！！！」

スパイダーは頭を抱えた。

「今だ」

バットは後ろに回り込み、首筋をかんだ。

『ガリガリガリ』

「や、やめろ・・・」

スパイダーの変身が解けた。

《勝者が決まったあ、勝者はブルーコーナーのバットだ!!!!!!!!!!》

——ワアアアアアアアアアアア——

再び歓声が上がった。

《おっと、ここで新情報です!!!!!!別会場でBグループとCグループの勝者が決まったようです》

スクリーンに勝者の映像が映し出される。

《Aグループの勝者は、バット!!!!!!!!!!Bグループの勝者は、スコ
ーピオン!!!!!!!!!!Cグループの勝者は、ホッパー!!!!!!!!!!》

これで3人の勝者が決まった。

この中から01《ゼロワン》として生きるものが出てくるのだ。

【第一章】

「はあっ、はあっ！」

一人の青年がひたすら何かに追いかけている。

その青年を追いかけているのは、7人のマスクをかぶった兵士だった。

「くっ！」

青年は立ち止り兵士の方を向いた。

「しょうがない」

青年はショッカーベルトを腰に付けた。

「グオオオオオオオオオ」

すると、体中に電流が走り怪物へと変化した。

「キシヤ——」

その怪物は7人に飛び蹴りを決め、その7人は爆発した。

「まったく、しつこい奴らだ……」

怪物は変身を解こうとした、しかし

《ドクン……ドクン……ドクン……》

「クツ……ガアアアアアアアアアア……!!!!」

怪物は目の色を変え、もがき苦しみ、ひたすら走り続けた。

「立花オートレーシング」

「ねえ、おじさん！」

バイク倉庫にいる一人の女性が呼んだ。

「一体何だい？ルリ子ちゃん」

呼ばれたのは立花藤兵衛、この立花レーシングのオーナーだ。

「このバイク何ですか？」

ルリ子は布に包まれたバイクを見た。

「これはな、俺がこつそり毎晩手入れしているバイクだ。」

「なんでコレだけ特別扱いなの？」

「それはな．．．．．」

「???」

「こいつぁ、俺の最高傑作だ！」

「でも最高傑作なら速く売って、お金にすればいいのに」

「あと少して、こいつが役に立つ気がするんだ．．．．．あと少しで」

「???何かよくわかんない」

「はい！よく分からなくて結構！！そっちの工具の入ったダンボ

ールカウンターに持ってといて」

「はい……あつ！あとで買い物行っていい？」

「別にいいよ」

くその後く

「く」

ルリ子は買い物バックに肩をかけて、歩いていた。

《……ドクン……ドクン……ドクン……》

それを茂みから見ている目があった。

「キシヤ
ツ」

「何なんだ……ありゃあ」

藤兵衛は呟く。

くその後く

怪物は夜の廃墟にいた。

《ドクン……ドクン……ドクン……ドクン……》

「俺は……何なんだ？」

すると不思議と変身が解ける。

「今日はここで泊るか・・・よし！明日は久しぶりに出かけてみるか・・・」

～次の日～

「・・・・・・・・・・」

昨日怪物へと化した青年が立花オートレーシングの前にいる。

——何だ？——

——ここは不思議と懐かしい——

——取り合えず入ってみるか——

青年はドアをノックする。

「ア——、はいはい」

中からルリ子が出てくる。

「すみません、今日って開いてますか？」

「すみません、今日定休日なんです」

「そうですか」

青年が帰ろうとしたその時、

「ちょっと待った！！！！」

「？」

青年が振り返ると見覚えのある顔だった。

——何だ？この気持ちは——

——すごく見覚えのある顔だ——

——あ！思いだした！！——

「おやっさん？」

「やっぱり、猛か！本当に猛なんだな！」

「はい」

「……」

「何故俺は「はい」って言ったんだ？」

「猛……それが俺の名前か？」

「……そうだ、この人は俺のオートレースの師……立花藤兵衛さん……」

「俺は……本郷猛……」

「立花オートレーシング」

「おじさん、この人だれ？」

「あつ、そういえば初めてだったな」

藤兵衛はルリ子に説明する。

「彼は本郷猛、俺の最高傑作だ」

「バイクじゃなくて？」

「バイクじゃない、人として俺が育て上げた最高傑作だ」

「へえ」

ルリ子は展示しているバイクを眺めている猛を見た。

「（ボソッと）結構イケメンじゃない」

猛はルリ子を見返す。

「？」

「／／／」

ルリ子は目をそらす。

これが2人の関係の序章だった。

【第三章】（前書き）

遂に01登場です！
しかしいつもより短いです。

【第三章】

くシヨツカー本部く

「おのれ、まだ本郷を発見できぬのか！」

シヨツカー幹部ゾル大佐が叫んだ。

「まあ、落ち着け！今までは戦闘員で搜索させていたが今度は怪人に行かせればいいだろう」

それを地獄大使がなだめる。

「まあ、それもそうか・・・よし、スパイダーでも派遣しよう」

く立花オートレーシングく

ドアの前に男が立っている。

「……………」

立花藤兵衛が出てくる。

「あんた、何か用か？」

男は口を開いた。

「本郷猛は居るか？」

「ああ、いるよ」

「今すぐ連れてこい」

「分かった」

藤兵衛はすぐさま猛を呼びに行った。

「数分後」

「はいはい」

猛が出てきた。

「お前が本郷だな？」

「それが？」

「こっちへ来い」

（廃墟）

男はショッカーベルトを付けた。

「お前を排除する、本郷猛！」

男はスパイダーとなった。

「ショッカーか！」

猛はライダーベルト《タイフーン》をとりつけた。

「さて、ライダーベルトのお手並み拝見と行くか」

猛は特定の構えをとった。

「変身！」

するとタイフーンの風車が回転し、その風のエネルギーが猛を包んだ。

「はあっ！」

猛が振り切ると風が消えてそこには怪人とはまた違う姿をした、者が立っていた。

【第四章】（前書き）

すいません！久々の更新です！

【第四章】

「ほう、それが01システムの姿か」

「・・・・・・・・」

01は自分の姿を見て驚いている。

「これが01！」

こっそりついてきた藤兵衛は驚いた。

「あれが猛！？」

スパイダーは01を挑発する。

「さっさとかかってこい！」

「はあっ！」

01はスパイダーに襲い掛かった。

「おらあああああ！」

しかし01が攻撃をする前にスパイダーは口から糸を吐き01を縛り壁に打ち付けた。

「くっ」

01はその場に倒れた。

「はっはー！まだ力を使いこなせてないらしいな！」

「くそっ」

01は糸を解こうとするが外れない。

「無駄無駄！そいつはかなり頑丈だぜ！」

「うおおおおおおおおお！」

タイフーンの中央にある風車を逆回転させ大きな風を起こした。

「チイ、なんだこの力は！」

踏んばらないと体を支えきれないほどの風がスパイダーを襲い、それとともに風のパワーで01を縛っていた糸が消滅した。

「はあっ、はあっ！」

風の消滅とともに01の変身が解けた。

「猛！」

藤兵衛は思わず本郷の前に駆け寄った。

「なんだジジイ！」

「これ以上猛に手を出すな！」

本郷は遠のいていく意識の中で目を開けた。

「……………おやつさん」

「まあいい、2人まとめて地獄へ送ってやる！」

スパイダーは腕に装備されていたナイフを取り出した。

「死ねえええええ！」

その時バイクの爆音が鳴り響いた。

「何だ？」

「はっ」

突然乱入したバイクはスパイダーに突撃した。

「ぐはっ！」

スパイダーは跳ね飛ばされた。

「フウー」

男はバイクから降り本郷の方を見た。

「お前が01か」

「あんたは？」

「・・・・・・」

男は質問に答えずスパイダーのほうを見た。

「改造人間つてのもそこまで強くないんだなあ」

「何だと！戦闘員！」

スパイダーが叫ぶところからともなくマスクをかぶった5人の兵士が現れた。

「おいおい、6人は卑怯だろ！」

男はバイクのヘッドギアからタイフーンに疑似しているベルトを出し、腰に装着した。

「チェンジ
変身」

すると男の体が特殊な黒いスーツで包まれ男はさらにヘルメットをヘッドギアからだし、かぶった。

「何だお前？」

「俺は^{たきがすや}滝和也、言うならば『^{マスクド・ソルジャー}仮面兵士だ」

これがこれから01達と協力することとなる滝和也との出会いだった。

【第五章】（前書き）

これから仮面兵士はソルジャーっていう風に書きます。

【第五章】

「何をしている！さっさと殺れ！」

「くくくくイーツ」「くくくく」

5人の戦闘員はソルジャーに襲いかかった。

「おらあっ！はあっ！」

ソルジャーはまず1人目の戦闘員の腹部を殴り、2人目の戦闘員に回し蹴りを決めた。

「はあっ！どりゃあ！」

3人目、4人目を倒して最後の一人を倒そうとしたとき5人目の戦闘員はソルジャーの後ろに回り込みソルジャーの身を封じた。

「おらあああああああ！」

そこにスパイダーがソルジャーに蹴りを入れた。

「くっ」

「どうした！これじゃ手も足もでねえってか？」

スパイダーはソルジャーを蹴りまくった。

「くっ、しかたねえ……試作段階だが使ってみるか」

ソルジャーは戦闘員を振りほどき、スパイイダーから距離を置いた。

「いくぜ、ライドル！」

ソルジャーは赤いグリップのようなものを取り出し、Sのボタンを押した。

「ライドルスティック！」

すると赤いグリップが伸び、スティック状のものになった。

「はあっ！」

「何っ」

ソルジャーは高く飛び上がり、落下スピードに乗せて戦闘員の脳天にライドルスティックをたたきつけた。

「ライドル脳天割！」

「イーッ！」

戦闘員はその場に倒れた。

「さあ、残りはお前だけだぞ？」

「くそっ！」

スパイダーは空高く飛び上がり姿を消した。

「ケツ、逃げたか」

ソルジャーは変身を解いた。

「お前が01か」

男は本郷のほうを見た。

「あんたは何なんだ？」

藤兵衛の質問に男は答えた。

「俺は滝和也。FBIの対ショッカー部隊隊員だ」

「そんなやつがなぜここに？」

「話は後だ、取り敢えずこいつを家に連れてくぞ」

「お、おう」

く立花オートレーシングく

「キャツ！猛さんどうしちゃったの？」

ルリ子は傷だらけの本郷を見て驚く。

「はいはいどいて、お嬢ちゃん」

滝は本郷を抱えながら寝室へと急いだ。

「ねえ、あの人は？」

「俺もようわからん」

く寝室く

そこにはベッドに本郷がぐっすりと眠っていた。

「でさっきの続きだが、俺はショッカーを追って日本に来た。」

「猛はどうなっちまったんだ？」

その本郷の横で滝と藤兵衛が話をしている。

「本郷猛。奴はIQ600を持つといわれる頭脳明晰でオートレースでもかなりの腕前というスポーツ万能な能力に、この世の闇社会の黒幕のシヨツカーが目を付けた。奴らの真の目的は《世界征服》。そんなやつらに本郷は拉致され改造され、改造人間ホッパーとなった。そして半年前に開催されたシヨツカーコロシム。この大会は改造人間が戦い、優勝したものにシヨツカーが開発したベルト《タيفون》が渡された。そのパワーは超人的で使いこなせば他の改造人間なんて屁でもないくらいの強さを身に着けることができるといわれる。そして見事大会の優勝者に輝いたのはホッパーこと本郷だった。しかしタيفونを付けたものは今までの記憶をすべて除去したただシヨツカーに忠誠を誓うサイボーグと化す手術を受けなければならなかった。そこで手術中に本郷は逃げ出した。脳手術の途中で抜け出したため自分が誰だかわからず、たびたび来るシヨツカー部隊にホッパーとなり対抗していた。しかし手術のシヨツクからかシヨツカーベルトを付けると暴走し、夜な夜な人を襲っていたという。」

「ちょっと待て、ってことはこの前ルリ子が襲われた怪人は猛だったのか!？」

「ああ、たぶんな」

「猛にそんな過去があつたなんて」

「俺もかなり調べたからな、FBIの捜査力をなめちゃいけないぜ」

これが本郷猛の過去だった。

【第五章】（後書き）

どうも元気丸です。

ソルジャーのライドルはFBIと神敬介（仮面ライダーX）の父、神啓太郎によつて作られ、後にこのシステムはXライダーへと受け継がれるみたいな感じのストーリーが頭に浮かんだので書いてみました。

恐らく今後Xライダーは出ませんがね。

では、次回をお楽しみに♪

【第六章】

「ん．．．．！」

本郷は目を覚ました。

「ここは．．．．？」

本郷の起床に隣の椅子に座っていたルリ子が気付いた。

「滝さん！おじさん！本郷さんが起きましたあ！」

すると藤兵衛と滝が走ってきた。

「おお、猛！」

「やっとお目覚めのようだな」

「おやっさん、俺は？」

それに滝が答える。

「お前は丸一日寝ていたんだぜ？」

「丸一日？」

「ああ」

「つてかあんたは？」

「説明は後、飯食ったら表出な」

「????？」

く立花オートレーシング前く

食事がすんだ本郷はそとで待つてる滝野のもとへ向かった。

「飯食ったか？」

「ああ」

「じゃ行くぞ、ついてこい」

滝はバイクにまたがった。

「おい、待ってくれ。俺にはバイクが無い」

「それなら心配ない」

藤兵衛が店から出てきた。

「猛、お前に渡したいものがある」

くバイク倉庫く

そこには一つだけシートがかぶせてあるバイクがあった。

「おやっさん、これは？」

「お前がいつか帰ってくるようにと、俺がお前の前のバイクを改良して常に手入れを怠らなかったバイク《サイクロン》だ」

「これが、俺のバイク？」

藤兵衛がそのシートを剥がした。

「おい、早くしろ！」

滝が倉庫の入り口で待っていた。

「お、おう」

本郷はサイクロンに鍵を入れアクセルを踏み、滝とともに走り去っていった。

藤兵衛はつぶやいた。

「頑張れよ、本郷」

く森く

2人は森の奥深くでバイクを止めた。

「何なんだ、こんなところまで連れてきて。大体お前は何なんだ！」

本郷の声が森に木霊した。

「俺か？俺はショッカーだ」

「ショッカーだと？」

「どうした？この間の負けがトラウマになっちまったかあ？」

「くっ・・・貴様！」

「かかってこいよ！」

2人は腰にベルトを着け、叫んだ。

「変身！」

「チェンジ
変身」

滝はヘルメットをかぶり2人はそれぞれ変身した。

「うおおおおおお！」

「はっ！」

01は殴りかかった。

しかしそれをソルジャーはヒラリとかわした。

「そんなんじゃ、俺はたおせないぜえ？」

「くそっ！」

01とソルジャーとの戦いが続いた。

「そろそろ終わりだ！」

ソルジャーは2丁の拳銃を取り出し、連射した。

「くっ」

しかし01は耐えた。

「いつまで耐えられるかあ？」

ソルジャーは即座に回り込み、飛び上がった。

「ライドル脳天割！」

01はソルジャーのライドル脳天割をかわした。

「ジャンプ力だったら、こっちの方があぜ！」

01は大きく飛び上がり、空中から加速をつけてソルジャーに蹴り

を決めた。

「ぐはああああああっ！」

ソルジャーの変身が解け腰につけていたベルトがボロボロになった。

「ちえっ、これじゃあ当分変身できねえや」

01は尋ねる。

「お前、シヨッカーじゃないな？」

「ああ、騙してすまなかった。俺はFBI捜査官滝和也だ」

「FBI？」

「ほんとはお前なんか協力したかないんだけどね、上からの命令でさ」

「ってことは今は」

「お前の必殺技のテストだ」

「何？」

「お前の飛蝗の能力を生かした、ジャンプからのとび蹴りはどんな怪人でもイチコロさ！」

「まさかこんなところにいたとはなあ！」

2人が見た先には変身前のスパイダーが立っていた。

「この間はやってくれたけど、今日こそぶつ殺してやる」

ショッカーベルトを付け、変身したスパイダーは01に殴り掛かった。

「死ねえええええ！」

「ユ、ユ」

01はそれをかわし、空高く飛びあがった。

「何っ！？」

「はあああああ！」

スパイダー目掛けて01はとび蹴りをした。

「ぐ．．．おのれ01！これで終わつたと思うな！シヨッカーはお前を探すと同時に世界征服の計画を徐々に実行させている．．．

どっち道お前の負けだ!」

スパイダーはそう言い残して爆死した。

「夜の教会」

そこには一人の男と神父がいた。

「何用ですか?こんな夜中に神父さん」

「あなたは神に愛されていない」

「おいおい、俺もキリスト教の信者だ。そんなこと言ってもんじゃないぞ」

「いいえ、あなたは愛されてないんです。しかし私は愛されている」

「どういうことだ!神は平等に愛するといつもあんたは言っているじゃないか!」

「それはあなたが人間だからです。人間は愛されない」

「あんたも人間だろうが!」

「いいえ、私は……………」

神父はシヨツカーベルトを付けた。

「……………愛されるものです」

神父は蝙蝠男へと姿が変わった。

【第六章】（後書き）

スパイダーの死に方が結構あつけなかった気がする。

【第七章】

ある夜の街

「逃げろっ、早く!」

2人の男女が何かから逃げている。

「でもあれ何?」

「んなこと知るか、速く走れ!」

『アア・・・タスケテクレ・・・』

男女の後ろには無数の白目をむき、ヨロヨロ歩きながらくるゾンビたちだった。

『ダレカア・・・』

「何っ?」

「キャアッ!」

すると男女の前にもたくさんのゾンビだった。

「囲まれたか」

「どうするの?」

「洋子、逃げろっ!」

男は女を突き飛ばした。

「浩は?」

「ここは俺が食い止める、その間にお前は逃げるんだ!」

「そんなことできないわ」

「ここで2人とも死ぬよりましだろ!早く!」

「・・・・・・・・ツ」

女は涙を流しながら走り始めた。

「さあ、来やがれ化け物共!」

『ウオオオオオオオオオ』

無数のゾンビが男を囲み、襲った。

「浩ーッ!」

ゾンビの襲撃が終わると変わり果てた男の姿があった。

『ヨウコ・・・・・・・・ニゲ・・・・・・・・口・・・・・・・・』

「キャアアアアアアッ」

女は走り去って行った。

それを一人の神父が木に逆さにぶら下がって見ていた。

「ククク・・・・・・・・逃げてても無駄だというのに」

く立花オートレーシングく

「なあ、本郷」

「何だ？」

滝は朝から猛に新聞を見せる。

「夜な夜な吸血鬼に襲われる怪事件だってよ」

「何だそれ、都市伝説か何かか？」

「マジだって、証拠だってあるんだぜ？」

「証拠つたつて証言や、合成写真だろ？」

「お前は信じねえのか？」

「そんな非現実的なもの信じるかつての」

そついうと猛は出かけた。

「改造人間も非現実的だろうが・・・」

「街」

「」

ルリ子は街で買い物をしていた。

「そろそろ帰ろ」

ルリ子は少し街から離れた道を通っていくことにした。

『タスケテ・・・クレ』

「？」

ルリ子は後ろを振り向いた。

すると10体のゾンビがルリ子の後を追っていた。

「な、何？」

「ルリ子さん！」

「猛さん！」

そこに猛が駆けつけた。

「大丈夫ですか？」

「はい、でもなんでここが？」

「聞こえるんですよ、俺と同じ改造人間が人を襲うところ、そして襲われる人の悲鳴が！」

「俺と同じって……？」

「見ててください、俺の本当の姿を！」

すると猛は腰にタイフーンをつけると自動的にベルトが巻かれた。

「変身！」

猛は特定の構えをとり、変身した。

『グハアアッ』

ゾンビの一人は01に殴られ血を吐いて倒れた。

「血？・・・まさかこいつ等！」

バサッバサッバサッ

「その通りです」

突然上空から翼の生えた神父が現れた。

「シヨツカーかつ！？」

「我が名はホーマー・ミラー、近くの教会で神父をやっております。
またの名を《バット》」

「その神父が何の用だ」

「01・・・彼らは人間です、ただ私が作り上げたウィルスに感染しただけです」

「つまり、貴様を倒さないといいつらは治らないわけだ」

「ま、そういうことですかね」

そういつとミラー神父は腰にショッカーベルトをつけた。

「01、あなたは神に牙をむいた……許されないことです」

「お前が言う神は、大首領のことか！」

01はバットに殴りかかった。

「フン！」

バットはその攻撃を避けた。

「残念ですね、今日はこの後用事がありましてね……また今度会いましょう」

そのままバットは飛び上がり、去って行った。

「クッ」

本郷は変身を解いた。

「ねえ、猛さん！」

ルリ子が本郷近づいてくる。

「ぎゅーんぎゅーんや、説明して!」

「・・・・・・・・(汗)」

【第八章】

「立花オートレーシング」

猛はルリ子に今までのことを全て話した。

シヨッカーのこと、01のこと、滝や、この間ルリ子を襲った怪物の正体が猛だということ。

「そんな……猛さんが」

「本郷、説明はこんくらいにして奴らの居場所を突き止めるぞ」

「ああ、確か奴らは近くの教会に居るらしい」

「じゃあ、そこに行くか」

「待て、あの無数のゾンビ達はどうする？中身は人間だ」

「心配無用！」

と言うと滝はアタッシュケースからライフルを取り出した。

「こいつで仕留める」

「だから相手は人間だって言ってるんだろ！」

「バカ言え、こいつの先端にこいつを装着するんだよ」

「それは？」

滝はアタツシケースに入っていたもう1つのロケット弾頭を取り出し、装填した。

「高性能スリープ弾だ」

「麻酔弾か」

「そうだ、こいつは動物だったら必ず睡眠状態にさせることができる。行くぞ本郷！」

「ああ」

滝と本郷はバイクに乗り走り去っていった。

「ルリ子ちゃん？」

「……」

涙ぐむルリ子に藤兵衛はコーヒーを差し出す。

「そりゃあ、最初は誰でも驚くよ。俺も最初聞いた時は驚いた」

「おじさん、知っていたの？」

「俺も最近知ったんだ」

「私、どうすれば」

「ルリ子ちゃんがつらいのは解る。でも、一番つらいのは猛なんだ。あいつは今まで孤独で戦ってきた。我々はその事実を受け止めなきゃいけない、そうだろ？」

「……………うん」

「我々が協力するんだよ、猛に。そうすればあいつの孤独は解放される」

「……………」

「まあ、結局決まるのは自分自身だ。今後ルリ子ちゃんがどうするかは自分の胸に手を当てて考えればいいよ」

「夜の教会」

「本郷、ここで間違いない？」

「ああ、恐らくな」

滝と本郷はバイクから降り、教会の扉の前で立ち止まった。

「行くぞ」

「おう！」

本郷は扉を開けた。

「フフフフ、やはり来ましたか．．．．．」

「「!？」」

2人の前にはミラー神父が立っていた。

「神のお告げで来ることは解っていました．．．．．そして、貴方達が死ぬことも!」

「ケツ、不気味な野郎だぜ」

「殺りなさい、神に愛されしものたちよ．．．．．あの虫けらを食い殺しなさい!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ』

2人の前に無数のゾンビが立ちはだかる。

「チェンジ
変身」

「変身!」

2人はそれぞれ変身した。

「滝！」

「おうよ、喰らえっ！」

ソルジャーはスリープ弾を装填したライフルを構え、発射した。

ドオオオオオオオオ

スリープ弾は空中で爆発し、中から煙幕が広がった。

「グッ、何だこれはっ！」

「心配するな、改造人間には効かねえよ」

『ウウ………』

ゾンビたちは次々と倒れていった。

「本郷、後は頼んだ！」

01は頷き、ミラー神父の方を見た。

「なるほど、これで1対1の対決ができるわけですか」

するとミラー神父は不思議な笑みを浮かべた。

「ならば私も」

ミラー神父は腰にショッカーベルトを装着し――

「本気を出しましょう」

――変身した。

「ハッ！」

バットは空中に飛び上がった。

「私もこう見えてショッカーコロシウムで決勝まで行きましたからね、それなりの実力はありますよ」

バットは再び笑みを浮かべ、言った。

「ここでは戦いにくいでしょう、場所を移しませんか？」

「良いだろう、ついて来い」

01は教会から出て、サイクロンに跨り出発した。

バサッバサッ

それを追うようにバットも翼を広げ飛んだ。

く夜の港く

01はバイクを止めた。

「この辺でいいだろう」

「ええ、では始めましょう……フン！」

突然バットから強烈な超音波が出た。

その音波はすさまじく、周りの物が飛ばされる勢いだった。

「どうです？」

「ああ、凄いな……見た感じ」

「見た感じ？」

「残念だが、俺には効かん」

「周りを見た感じ、物が飛ばされているということは相当凄いな
ろうが01の機能には《ノイズカット》があり、100%騒音を力
ツトできる」

「クッ」

「これで、終わりだッ！」

01は高く飛び上がった。

「そんなに飛び上がってどうするつもりだ！」

「ハッ」

01は空中を蹴って反転した。

「馬鹿な、空中を蹴った……だと？」

「ハアアアアアッ！」

01はそのまま加速し、バットに蹴りを入れた。

「グッ……グアアアアアアッ！」

01の着地とともにバットは爆発した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9318m/>

仮面ライダー01【ゼロワン】

2011年11月6日14時13分発行